

VOL.1 あかねさす

EU - 日本学 NEWS

Program for EU-Japanology Education and Research (PEJER)

「あかねさす朝日の里のうらうらと光さやけき君が御代かな」(大江匡房)

「あかねさす」は「日」「光」などにかかる枕詞で、この歌のように空が茜色に染まる様子を表します。
茜色は本プログラム (PEJER) のシンボルカラーとなっています。

目次

- 1 EU-日本学教育研究プログラム スタート!!
EU-日本学プログラム推進室 紹介
- 2 スザンヌ・フォルマネク先生 講演会報告
- 3 前みち子先生 講演会報告
- 4 EU-日本学プログラム推進室からのお知らせ
1月～3月の予定
EU訪問 報告

近代日本の人文学を体系付けた
EUをパートナーに
世界に発信することができる
日本学を構築します。



プログラム説明会での藪田貴教授 (プログラム代表者)

EU - 日本学教育研究プログラム スタート!!

文部科学省がグローバルCOEに次いで募集した大学院教育改革支援プログラムに「関西大学EU-日本学教育研究プログラム」が採択されました。

Program for EU-Japanology Education and Research
愛称は、PEJER (ペジェル)。

平成20年度、関西大学大学院文学研究科は、新しいカリキュラムをスタートします。

大学院文学研究科に「主専攻・副専攻制」を導入

「EU-日本学教育研究プログラム」は、文学研究科に副専攻を設けます。日本研究の国際化と総合化を目指した、魅力的な4科目を開講します。文学研究科総合人文学専攻に所属する大学院生なら、どの専修に所属していても履修することが可能です。

EUの日本学をパートナーに

EUの諸大学で展開する「日本学」をパートナーに、わが国の日本研究を刷新します。わが国の日本研究は著しく発展しながらも、細分化を助長する傾向にあります。EUは27ヶ国と拡大、日本との経済・文化交流が進展し、日本学も新たに展開しています。近代日本の人文学を体系付けたEUを再びパートナーとして、21世紀の日本研究を考えます。

EU - 日本学プログラム推進室 紹介

本プログラムを推進するために、本学の千里山学舎、尚文館2Fに「EU-日本学プログラム推進室」を設置しました。プログラム代表者の藪田貴教授ほか、本プログラムで講義を担当する教育職員が立ち寄るほか、リサーチ・アシスタント(RA)と事業推進支援スタッフが常駐しています。

このプログラムで提供する講義科目や、学外で実施するワークショップなど、わからないことがあれば来室ください。プログラム担当者やRAと、直接話すことで、日本研究の現状と問題を考える機会としてください。

国際化が推奨されているものの、日本で行われる「日本」を課題とする教育研究は、まだまだ閉鎖的で国際性を欠いています。

21世紀を支えるみなさんに求められるべきところが何であるのか、みなさん自身が求めるべきところを、考えてまいりましょう。

今後、ヨーロッパ関連の書籍やヨーロッパにおける日本研究の論文など、日本学を研究するにあたって役立つ本を充実させていく予定です。

閲覧・複写の希望があればご連絡ください。

スザンヌ・フォルマネク先生 講演会報告

平成19(2007)年11月9日(火)、尚文館大学院会議室において「EU-日本学教育研究プログラム第2回研究会議」が開催されました。会議では、オーストリア国立科学アカデミーのアジア文化・思想史研究所研究員であるスザンヌ・フォルマネク先生に、「オーストリアにおける日本研究および教育の現状」と題し、ご講演いただきました。

「オーストリアにおける日本研究および教育の現状」

■ オーストリアにおける日本研究の160年

オーストリアにおける近代人文学としての日本研究は、A・フィッツマイヤーによる柳亭種彦作『浮世形六枚屏風』独訳版(1847年)にはじまります。1939年には、ウィーン大学で博士号を取得した岡正雄の尽力により、ウィーン大学日本学研究所が設立されました。同研究所は1945年の閉鎖を経て1965年に再興され、初期設立時に助手を務めたA・スラヴィクが主任教授に就任しました。以来、歴代主任教授の研究領域と呼応し、民族学・文化人類学・社会学といったフィールドからのアプローチを主体とする日本研究が展開されてきました。1987年にはオーストリア国立アカデミーにアジア文化・思想史研究所が設立され、宗教学と社会文化史を主軸として、当該領域のさらなる進展が図られています。これらの研究機関に加えて、オーストリアの主要大学では日本語教育プログラムが提供されています。さらには、ウィーン市内の複数の博物館において、日本関連史資料の整理・分析が進められています。

■ ウィーン大学日本学科における教育研究

ウィーン大学日本学科の歴史は、1965年の博士課程設置にはじまります。1978年に修士課程、2003年には学士課程が設置されました。3年間の学士課程においては、1年次に日本語学習を集中的に実施するとともに、歴史文化や政治経済など、日本に対する基礎理解を深めます。2年次には夏期休暇期間における160時間のインターンシップを含め、実践的に日本研究の方法論を学び、3年次に2編の卒業論文を執筆します。修士課程のカリキュラムはより専門性を増し、その中には古文も含まれます。博士課程は現在3年間のプログラムですが、将来的には4年間に改変される予定です。日本学科に在籍する学生には、「エラスムス・プログ

ラム」と呼ばれるEU間交換留学、およびウィーン大学協定に基づく日本の大学との交換留学の機会があります。卒業生の主要進路先は一般企業への就職が多数を占め、日本文化に対する理解度や日本語運用能力とは無関係の職種であっても、日本語という難解な言語を学習したという努力が、採用企業から高評価を得ているようです。

研究スタッフは恒常的に不足しており、現在は主任教授のS・リンハルト以下、準教授・助教授・助手が各1名という状況です。主な研究プロジェクトを時系列的に辿ると、1980年代には先見的な社会学研究として、日本の高齢化社会に関し、オーストリアとの比較研究が行われました。1990年代以降は、「拳(じゃんけん)」「パチンコ」「居眠り」などをキーワードに、日本人の余暇活動あるいは日本文化における遊びの概念について、社会学的・文化的観点から理解を試みる研究成果が提出されています。今世紀に入ってからは、天保期以降に隆盛した錦絵風刺画のデータベース化が推進されており、資料学の領域においても顕著な発展を示しています。

■ オーストリア国立科学アカデミー アジア文化・思想史研究所

現在、アジア文化・思想史研究所には報告者を含めて2名の研究員が在籍しています。研究所の性格は従って、研究員の個人研究領域と密接に関連しています。報告者は現在まで、日本の前近代における老年観や老人生活環境、前近代の出版文化など、主として社会文化史的なテーマを取り上げてきました。もう一人の研究員であるB・シェイドは、絵解き・遍路・他界観といった民間宗教における諸現象や、神道史といった宗教学的アプローチから、日本研究を進めています。



フォルマネク先生

主要大学では日本語教育
プログラムが提供され
ウィーン市内の博物館では
日本関連史資料の
整理・分析が進められています



ウィーン大学 日本学研究所

前みち子先生 講演会報告

平成19(2007)年11月30日(金)、尚文館内の認知発達実験室において「EU-日本学教育研究プログラム第3回研究会議」が開催されました。会議では、デュッセルドルフ大学現代日本研究科教授である前みち子先生に、「ドイツの日本研究の現状と国際日本研究ネットワーク作りの可能性」と題し、ご講演いただきました。

「ドイツの日本研究の現状と国際日本研究ネットワーク作りの可能性」

ドイツ語圏の日本関連研究所

ドイツ語圏地域における日本学関連の教育研究機関は小規模ながら数多く存在し、ドイツのベルリン自由大学、ボーフム大学、ボン大学、デュッセルドルフ大学や、ベルリン・フンボルト大学、ライプツヒ大学のほか、オーストリアのウィーン大学やスイスのチューリッヒ大学などが主要機関として挙げられます。特にドイツ国内に焦点を当てた場合、各機関の研究重点領域は政治学、経済学、文学、言語学、思想史など多岐にわたる反面、総合的かつ学際的な教育研究体制が十分に整備されているとは言い難い状況です。研究史の観点から述べると、1980年代以降、文化学や社会科学といった近現代研究の諸分野が、それまで日本学を牽引してきた文献学に取って代わり、現在では近現代研究の比重がより高くなっています。現在の学士・修士課程が設置されたのは、今世紀に入り高等教育改革プログラム「ポローニャ・モデル」が導入されたからのことです。学習する側にとっての日本学は、日本語運用能力と日本に関する一般的な基礎知識の両立を必要とするため負担が大きいものの、広範な視野を獲得できるという大きな利点を備えているのも事実です。

デュッセルドルフ大学 現代日本研究科の教育研究

デュッセルドルフ大学現代日本研究科は1987年、修士課程の副専攻科目として設置され、1998年に主専攻科目の認可を受けました。以来、語学教育プログラムと文化学系統・社会科学系統の学際的な研究体制を両立させるとともに、日欧双方の視点を交錯させる多角的な教育研究内容を構築してきました。学生数は、高等教育改革プログラム導入後に学費納入制度が採用された2004年を除いて増加を続けており、2006年冬学期現在は388名が在

籍しています。学士課程においては、1・2年次に日本語と歴史・社会・文化などの基礎科目を学習し、3年次にインターンシップの参加を経て卒業論文を執筆します。大学院課程においては、高度な日本語能力を基盤とした、学際的かつ実践的な教育研究が展開されています。実践教育に大きな役割を果たしているのが大学間協定による日本への留学制度で、基礎学習終了後の早い段階で日本滞在を経験することを奨励しています。現在では慶應義塾大学など6大学と協定を締結し、年間20人以上の学生を日本へ派遣しています。

デュッセルドルフ大学現代日本研究科の 研究動向にみる日本研究の現状と課題

デュッセルドルフ大学現代日本研究科においては、文化学と社会科学の2系統から、近現代日本における社会文化の展開過程と諸問題を研究しています。また日本に対する内と外の視点を比較するとともに、両者を交えることによって、より広範な文脈に日本を位置付けることを目指しています。具体的な研究内容を紹介しますと、文化学系においては報告者が近現代社会におけるトランスカルチャリティや、家族・母性概念の日欧文化比較などをテーマに研究を進めています。社会科学系においては、島田信吾が高齢化問題や移民社会などを中心に比較社会学の方法論による研究を展開しています。さらに、現代日本研究系においては、アネット・シャート＝ザイフェルトが人口学やジェンダー研究(男性学研究)など現代日本社会の問題を扱っています。こうした動向から日本研究を国際的レベルにおいて展開するための課題を探ると、現代日本社会の問題に対応する課題設定とそれを実践する学際的方法論、日欧を軸とする多角的視点、異文化横断的な研究領域の総合的発展などが希求されているといえるでしょう。



前みち子先生(写真中央)

日欧を軸とする多角的視点、
異文化横断的な研究領域の
総合的発展などが
希求されています

EU - 日本学プログラム推進室からのお知らせ

○時間割

日本学フィールドワーク	水曜6限
日本学学術コミュニケーション・トレーニング	木曜6限
EU-日本学講義	火曜6限
EU-日本学ワークショップ	集中講義

○フィールドワークの実施

- 1/24(木)～25(金) 奈良「天平の文化遺産を巡る」
3/13(木)～14(金) 京都「京都に公家文化を訪ねて」

1月～3月の予定

2008.1.22～30	ルーヴェン・カトリック大学(ベルギー)の特別学術職員 ネラさん来日
2008.1.24～25	奈良フィールドワーク
2008.2.9～10	大学院GPポスターセッション(横浜市)
2008.3.12	EU-日本学教育研究プログラム 院生説明会
2008.3.13～14	京都フィールドワーク

EU訪問報告

EU-日本学教育研究プログラムにとって、EU内で日本学のパートナーを得ることは必須の条件である。とくに関西大学とルーヴェン・カトリック大学で行なわれる日本学ワークショップは、双方の院生が交流する場であり、そこにEU内諸大学の日本学科で学ぶ院生が姿を現すことが不可欠である。その共同の枠組みづくりのために、12月9日～15日、杉谷真佐子教授(EU-日本学学術コミュニケーション・トレーニング主幹)とともに下記の大学・機関を訪問し、関係の先生方と面談、協議した。その際、新たに、英語と日本語併記の形で作成したEU-日本学教育研究プログラムのリーフレットを提示し、説明を加えた。

デュッセルドルフ・ハイネ大学	現代日本研究科	島田 信吾 教授
		藤田 香織 日本語講師
ケルン大学	日本学科	Franziska Ehmche 教授
国際交流基金ケルン日本文化会館		上田 浩二 館長
ルーヴェン・カトリック大学	日本学科	Willy Vande Walle 教授
		Dimitri Vanoverbeke 教授
		R.A. Nele Noppe 氏

どの大学でも、本プログラムへの関心は高く、ポローニャプログラムのもとでEU内に統一的な学部・大学院制度が導入されている事情から、それに合わせて連携を図りたいとの意向が表明される所もあった。協議の中心である二度のワークショップへの参加については、積極的に協力するとの返事をすべての大学から得た。一方、日本への関心の減少から、日本学科の再編が急速に進んでいる(とくにドイツ国内)との説明を受けたが、それに対応する日本学関係者の苦労が伺われた。(藪田貫 記)



日本文化センター



ケルン大学日本学科ポスター

EU-日本学プログラム推進室(尚文館2F)

開室時間

月～金 / 10:00～17:00

住所

大阪府吹田市山手町3-3-35

URL

<http://www2.kansai-u.ac.jp/eu-japan/>

E-mail

eu-japanology@cm.kansai-u.ac.jp

TEL

06-6368-1111 (+4846)